
夢魔

阿万

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢魔

【Nコード】

N7462X

【作者名】

阿万

【あらすじ】

佐伯由麻は仲間と共に学校に隠されてあつた鏡を興味本位で覗いてしまう。それが悪夢の始まりになるとも知らずに……

遙のことを考えると気持ちは重い。由麻は彼女のことを大親友だと思っていたし、絶対に二人で帰ると約束したからだ。

背後にはまだ鉦男がいたし、目の前には吸血様が大きなマントを広げて優雅に構えていた。

響はやられてしまったのだろうか。彼女は恐怖で涙を流した。

響。響はどこ？ 彼がいなかったら、こんな不条理な世界でどうすればいいというのだろう。

笑い声を上げ、吸血様が動いた。

この世には狂気の世界があり、見え隠れしているが、多くの人間はそれには気づかない。だが確実にそれは存在し、もう一つの世界を垣間見ることがある。それを見た人間は、特別な人間かもしれないが、大抵の者はそれに気付かない。

それは別に霊の世界とか、地獄だとか、闇の世界や地下の世界や、別次元の世界のことではない。それは誰しもが垣間見る世界であり、誰しもが訪れる可能性のある世界である。

公立西蘭せいらん高等学校に通う佐伯由麻さえきゆまは二年生のわりと普通の生徒だ。髪はセミショートで、背は低い。胸は小さいが気にしていない。それなりに明るい性格をしている。友人には市谷遥いちがやはるかという由麻よりも幾らか背が高く顔は一般受けする柔らかな顔で、髪型はポニーテール。由麻より遥のほうが胸の発育がよかった。二人ともそんなことは気にせずに毎日たわいもないお喋りを繰り返していた。

最近由麻は学校が退屈に思えてきて、少しモチベーションが下がっていた。成績は段々と下がるし、あまり友達も多いとは言えない。遙との会話だけが学校での楽しみといえた。

由麻は男子からさほど受けがいいわけではなかったが、中学時代に一緒だった沢登響さわのほりひびきだけは別だった。彼は気さくに由麻に話しかけてくる。男子に話しかけられるのが苦手な由麻は、だが内心では悪い気はしていなかった。

なんといつても響は顔がいい。背が高く、スマートな体型をしている。優しい、爽やかな性格をしていた。だからなのか響は女子に人気があり、その響に気さくに話しかけられる由麻はある意味一置かれていた。

「おはよう由麻」ショートホームルームが始まる前に今日も響は由麻に気さくに声をかけた。

「おはよう響。昨日は楽しかったね」

「そうだな。また今度いこうぜ」

昨日は遙を誘って三人でボーリングをしたのだ。半分はクラスの女子に対するあてつけ。もう半分は純粹に友人として楽しむため。

「おはよう響くん」遙はおずおずと響に挨拶する。

「よう。次は猛練習しないとな。スコア百くらいはいけよ」

「へえ、お前達三人で楽しんできたのかよ」響の友人の湯原貴春ゆはらたかはるが会話に割り込んできた。短い髪を後ろになびかせるように立たせて

いる彼は響とはタイプの違う、無骨な顔をしている。背は響より低いが肩幅は少しがっしりしている。

「貴春も今度こいよ」

「いいのか？」

「男女比は一緒のほうがいい」

勝手に決めんじゃねーよバカ響。由麻は苛立たしい気持ちになった。貴春なんてよく知らない奴と一緒になんて……でも、いいかもしれない。友人を増やすすいチャンスだ。男友達なんてそれこそ響くらいしかない。そう思うと苛立ちがふつとなくなった。

「どうせなら繁しげるの奴も誘っていいかな？ ついでに繁の彼女も誘って」

「いいねえ。三対三で勝負できるわけだ」響は興奮していた。

「ねえ、あたし下手だから、お荷物になっちゃうよ？」遙が慌てて口を挟んだ。

「いいさ。ハンデつけることもできるし」

結局六人になった。由麻は少ししらけてしまったが、まあ、いいかと思うことにした。

「なんだかごめんね遙。勝手に決められちゃった」

「うん。でも人数多いほうが楽しいかもね」

遙がそれでいいなら由麻もそれでよしとすることにした。

三

ボーリングは思いのほか盛り上がった。由麻と遙と響のペアと、貴春それに内藤繁、その彼女である高橋香住のペア。由麻のチームの主力は響で、相手は貴春と香住が上手かった。内藤繁と香住は仲のいい恋人同士で由麻は二人のことを羨ましく思っていた。

何回も試合をしたが、結局響が活躍したおかげで由麻たちのチームが勝ちを制することができた。敗者は夕食を奢ることになっているので、六人はボーリング場を出て近場のファミレスへ向かった。途中で突然繁が足を止めた。

「どうしたの？」手を繋いでいた香住が気にとめた。

「俺学校に忘れ物した。今から戻るよ」

「なら俺達も行くよ」響が言った。

「いいって。別に大したもんじゃないし。そういえば学校って言えば、あの噂、知ってるか？」

「何の」

「学校の旧校舎にある鏡。その鏡を覗くと別の世界に行けるって話だぜ。それで、戻ってこれないんだってよ。マジ話。超怖いだろ」

「旧校舎の鏡の話は有名だよな」と、貴春が言った。

「面白そうだ。行って見ようぜ」響が大いに興味を持ったようだ。

由麻は面倒なことになったと思った。学校なんて戻りたくない。ましてや旧校舎なんてただの廃屋だ。夜の旧校舎なんて不気味そのものじゃないか。しかし、結局その場の空気には逆らえず、足は学校へと向かっていった。

夜の旧校舎はいつも以上に不気味だった。由麻は唾を飲み込んだ。昼間ですら旧校舎に忍び込むというのは一種の肝試しのような行為で、一部の者たちが興味本位で行ったりするのだが、大抵は青ざめた顔で戻ってくる。昼を夜に変える雰囲気とその廃屋にはあるのだ。

空いている窓に六人は忍び込む。懐中電灯の光を頼りに進み、問題の鏡を発見した。使われていない美術室の隅に、その大きな鏡台はあった。

「こんなのどうでもいいよ。早くでようよ」遙が震える声を出す。由麻は鏡をまじまじと見る。大きな鏡台は由麻の上半身を映していた。ぼんやりとした自分の姿はなんとも不気味だった。顔は綺麗だけど由麻はにんまりしてみる。だが微笑む自分がどこか不気味だったのですぐにやめた。

「光の加減が悪いんだから」由麻は呟く。

「はあ？ なあ繁、これが言っていた鏡か？」響は嬉しそうだ。繁もしげしげと鏡台を眺めた。「そうじゃ、ないかな」

どうも繁の顔色が青ざめているように由麻には見えた。無理もない。これがもし言っていた鏡だとしたら……。

「ねえ、これに映るとまずいんじゃないの？」由麻は今更不安になった。

「大丈夫。キャンディマンって五回唱えないと何も起こらないよ」貴春がふざける。

「何それ？ ね、帰ろうよ。気持ち悪い」香住が繁の腕を引っ張る。なんだか気持ちの悪いなと由麻は思う。これは本当に気持ち悪い。怪談話になるのも無理はないと思う。だがこれだけ不気味な鏡なのだ。誰かがこの鏡台を見てそんな怪談話をでっち上げたということもありえる。それだったら、単なる作り話で終わる。まあ、どっちでもいいからさっさと引き上げたい。こんなところは嫌だ。

「どうすれば鏡の世界にいけるんだよ？」響が嬉々とした面持ちでたずねる。

「鏡に触れるとやばいらしいな」繁が声を低くしていった。思わせぶりなのではなく、本気で怖がっているように見えた。

「へえ」響がそういうが早いが手を鏡につけた。

「大胆な奴だよ」貴春もそれに続いて手を鏡に触れる。

「ほら、二人も」

響は由麻と遙の手を取って鏡につけた。遙が小さな悲鳴を上げた。

「響、ひどいよそれは」

由麻が抗議すると響は笑った。「大丈夫だって。ほら、何にも起こらなかっただろ？」

「だからって……遙は怖がりなんだからね。あんまり怯えさせないで！」

響はいつものように微笑を絶やさないでいる様子とは違って変わって今にも泣き出しそうな遙を見て、多少罪悪感を覚えたようだ。

「ごめんな。ちよっとした冗談だったんだ。悪かったよ。もう出よう。気分直しに明るいところで飯にしよう。遙には俺がチョコパフエ奢ってやるよ」響は遙の頭を撫でた。

子ども扱いすんなよ。由麻は呆れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462x/>

夢魔

2011年10月21日01時01分発行